日本大学
大学史ニュース
2025.03
Vol.28
日本大学広報部広報課（大学史）

目次

◇特別展「学祖と日本大学　その軌跡」 …… 2
◇山口県　学祖山田顕義関連展示 …… 3
◇岐阜市　学祖山田顕義関連イベント …… 3
◇山田顕義と新宮簡　―西南戦争こぼれ話― …… 4
◇「佐賀の乱」の史跡を巡る② …… 6
◇戦時期の日大三中（旧制）関係資料の寄贈 …… 7



特別展「学祖と日本大学　その軌跡」を開催しました

日本大学創立135周年、学祖生誕180年である令和６（2024）年11月、東京都千代田区の日本大学お茶の水校舎１階エントランスで大学史の特別展を開催いたしました。展示施設ではない場所での開催でしたが、本学学生およびそのご家族、教職員、校友の皆さまのほか、一般の方にもご来場いただきました（２頁）。

◆特別展「学祖と日本大学　その軌跡」



学祖山田顕義コーナー



学外活動、学内生活写真のスライドショー

令和６（2024）年11月16日から24日までの９日間、日本大学お茶の水校舎１階エントランスで、学祖生誕180年・創立135周年を記念して特別展「学祖と日本大学　その軌跡」を開催しました。この特別展では、学祖山田顕義と日本大学史のコーナーを設け、それぞれ実物資料やパネルで軌跡をたどる構成としました。

山田顕義コーナーでは、松下村塾、軍人、政治・法律、教育というテーマを設定し、パネルとともに関連資料を展示しました。また、護国寺の墓所から出土した遺品の帽子や墓所発掘調査の際に作成された頭部復元像を展示しました。

大学史コーナーでは、創立期、大学昇格～戦中期、戦後～現在、スポーツのテーマで実物資料を展示しました。２台のモニターを設置して、大正から昭和30年代頃の学内生活写真、学外活動写真をスライドショーで紹介しました。

特別展に併せて、学祖と日本大学の創立期を紹介したリーフレットを作成して配付しました。また、アンケートにご回答いただいた方には、西南戦争のときに学祖山田顕義が活躍した川尻川の戦いの錦絵が描かれたクリアファイルを配付いたしました。

９日間という短い会期となりましたが、約400名にご来場いただきました。本特別展開催にあたりご協力いただきました関係者の皆さま、関係諸機関に心より御礼を申し上げます。

（松原）



特別展チラシ



特別展会場となった日本大学お茶の水校舎

◆山口県　学祖山田顕義関連展示

学祖生誕180年の令和６（2024）年には、山口県各地域で学祖に関する展示が開催されました。防府天満宮歴史館では、４月から10月まで山田顕義企画展として、同館顧問である一坂太郎氏所蔵資料を中心に学祖関連資料11点が展示されました。また、山口県立山口図書館では、９月から11月まで１階明治維新人物ギャラリーにおいて「生誕180年山田顕義」と題して、山田顕義関連書籍が展示されました。

10月３日から12月３日、萩市松陰神社宝物殿至誠館では、特別展「吉田松陰・読書のすすめ」とともに「山田顕義最期の帰萩茶会」展が同時開催されました。明治25（1892）年、幕末以来久しぶりに故郷である萩を訪れた山田顕義は、地元民からの歓待を受け、松陰兄の杉民治茶室で茶会が催されました。さらに、学祖死後、萩で追悼茶会が、萩、徳山で追悼法要が執り行われたことを紹介しています。展示内容については、当課発行の『大学史論輯　黌誌』第20号に松陰神社宝物殿至誠館樋口尚樹館長の論考が掲載されていますので、ご興味のある方は併せてご覧ください。　（松原）



松陰神社宝物殿至誠館



山田顕義最期の帰萩茶会展

◆岐阜市　学祖山田顕義関連イベント

明治23（1890）年９月、長良川鵜飼を観覧した学祖が詠んだ「風折烏帽子」小唄の保存継承活動の一環として、岐阜伎藝學院主催のイベント「話と舞　君に捧げん鮎のうを」が令和６（2024）年９月に岐阜市せいらん会館で開催されました。國學院大學の渡邉卓准教授、岐阜市文化財保護課歴史遺産活用推進係の福井絢子氏、日本大学広報部広報課の松原が、長良川鵜飼とゆかりのある有栖川宮幟仁（たかひと）親王、献上鮎、山田顕義と加藤ひなについて講演しました。講演後、鳳川伎連喜久次氏による風折烏帽子の舞が披露されました。皇典講究所でつながりのある学祖と有栖川宮幟仁親王は、岐阜長良川の鵜飼でも接点があることを知っていただくよい機会となりました。　（松原）



福井絢子氏の講演「献上鮎のいろいろ」



鳳川伎連喜久次氏 風折烏帽子の舞

◆山田顕義と新宮簡　―西南戦争こぼれ話―

今から約150年前の明治10（1877）年、日本最後の内戦とされる西南戦争が勃発し、九州南部（熊本・宮崎・鹿児島）は約７カ月の間、戦場となりました。この戦争に、学祖山田顕義は陸軍少将として別働第二旅団を率いて参戦し、多大な貢献をしました。

今回は、西南戦争のうち、人吉攻略ごろの顕義と、顕義に従って動いた新宮簡（しんぐうたけま）について紹介します。

まず、人吉攻略に参加するまでの顕義について概観しておきましょう。顕義は、衝背（しょうはい）軍として３月下旬に長崎を経て熊本県の八代に上陸し、翌月15日、膠着（こうちゃく）状態であった熊本城をめぐる攻防戦を制して熊本城へ入城しました。その後の熊本城下での戦いも政府軍の勝利に終わり、薩軍は城下からの撤退を余儀なくされます。

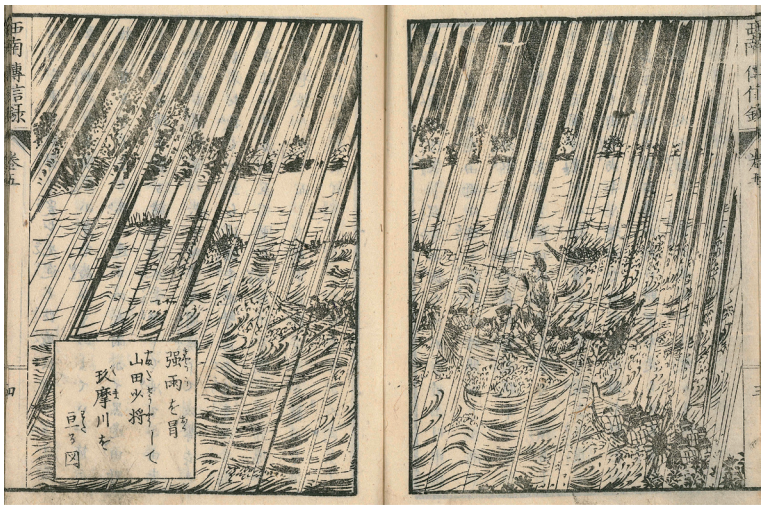
４月下旬、薩軍は熊本県南部の人吉を拠点に戦うことを決定し、同地に集結しました。翌５月６日に政府軍は人吉攻撃を決定、顕義率いる別働第二旅団が主攻部隊となることが決まります。顕義の指揮の下、政府軍は人吉へと続くいくつもの街道を押さえて徐々に薩軍を包囲し、６月１日、ついに人吉市街地へ進撃、同日制圧しました。

『日記　別働第二旅団』の人吉を制圧した当日の記事によれば、「薩摩日向界ノ地方へ向ケ斥候兵ヲ出ス」と、制圧後ただちに逃げた薩軍を追って探索を開始しています（６月２日の日記にも同内容の記載あり）。また、翌日の『山田中将日記』によれば、「今日ヨリ十日迄人吉防守ノ準備幷ニ二全団ヲ五方面ニテ砲廠、会計、輜重、軍医部ヲ分賦ス」とあり、人吉の防衛体制を固め、組織編制を行ったことが分かります。

『西南伝信録』の巻之五（斎藤弘造編集・出版、明治10年９月）では、「第九回　岳家の兵法山田攻バ必ず取り張飛の奮勇村田禦で遂に敗る」と題し、人吉攻略時の顕義の活躍が取り上げられています。ここでは顕義のことを次のように紹介しています。

> 戦地出張の将官ハ、何れを巧とし何れを拙と分評しがたく、皆其職に堪ゆるの人のみなれども、就中用兵に巧ミなるハ山田少将にて、氏の兵を用ゆる出没常なく変化時に応じ、兵士を多く損せずして全勝を収むるを以て専ら目的とす。実に将官の将官たる人と云ふべし。

このように優れた将官が揃う官軍の中でも特に「就中（なかんずく）用兵に巧ミなる」「実に将官の将官」と絶賛された顕義が率いる別働第二旅団は、人吉の戦いにおいて主攻部隊として活躍しましたが、同時に、多くの敵兵に投降を呼びかけ、地域の平定・復旧にも努めました。なお、ここで投降したのは、いわゆる「薩軍」だけではなく、薩軍に呼応して立ち上がった諸隊の人々も含まれます。人吉では「人吉隊」が結成され、薩軍とともに政府軍と戦っていました。



「強雨を冒して山田少将玖摩川を亘る図」（『西南伝信録』より）
右ページ中央の船に乗った人物が山田顕義

顕義が人吉を攻略するにあたり、人吉出身の新宮簡という人がひそかに活躍しました。新宮は、文政10（1827）年生まれで、顕義より一回り以上年上の人物です。旧名を行蔵といい、尊王攘夷派として江戸で活動したほか、鳥羽伏見の戦いにも出征しています。明治２年に人吉藩権大参事に任命され、さらに人吉藩の代表として公議人や集議院幹事も務めました。廃藩置県後も人吉県に出仕し、明治５年に八代県（熊本県南部と人吉県等が合併して成立した県）の大属、明治７年に陸軍中尉兼裁判中主理となります。脚気のため明治９年に陸軍を辞しましたが、西南戦争の勃発により招集され、明治10年３月、顕義の配下として長崎から熊本県の八代へ上陸しました。『球磨郡誌』の「人物誌」には、４月下旬より人吉方面の偵察を行ったと記されています。また人吉の戦いの頃については、「六月一日旅団長に付き人吉に入る。命に依り地方の宣撫及糧食及軍夫の供給事務を担当す。」と記されており、顕義に

従って人吉に入り、さらに土地の事情に明るい新宮が、命により人吉の鎮撫等に当たったようです。『西南戦役秘帖：球磨史伝』によれば、明治10年６月段階では別働第二旅団の砲廠部に所属する裁判中主理であったとされています。

人吉が落とされた後、人吉隊の中には逃走するものが続出、また単独で官軍に投降するものもありました。この混乱期に新宮は人吉隊に政府軍への帰順を勧める役割を担い、帰順しない場合は４日に総攻撃をする旨を伝えたといいます。これを受けて人吉隊は４日に投降し、以後政府軍が彼らの処遇を決めていくことになります。

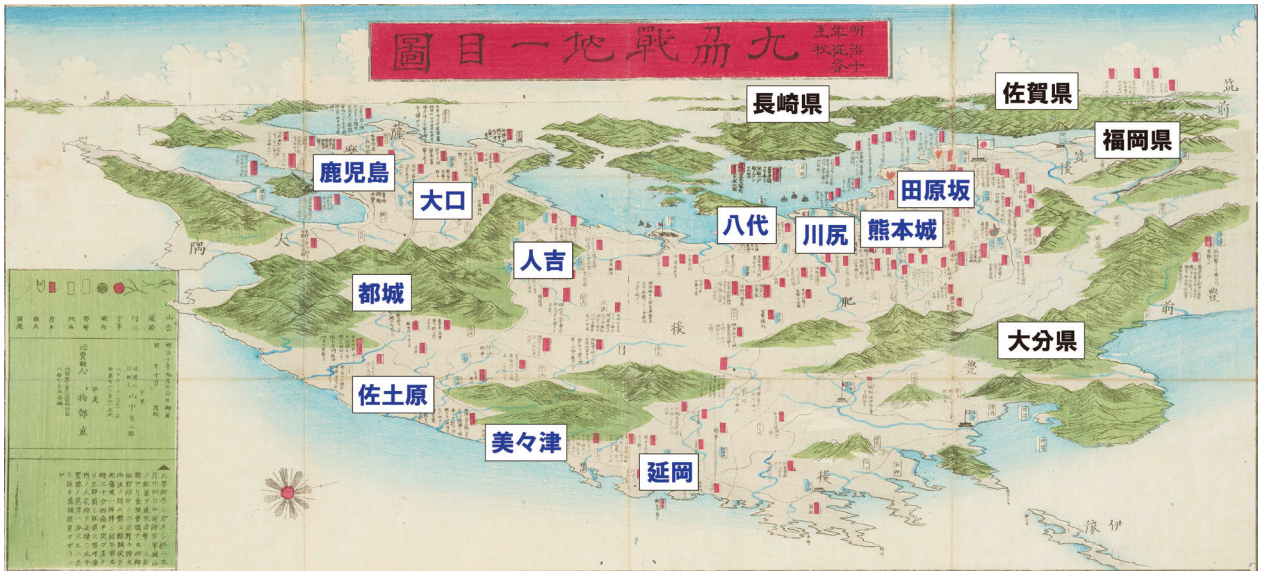
熊本県の公文書『公文類纂』に、明治10年６月14日付の「人吉降伏人ノ内七拾壱名山田少将より支庁江引渡ノ始末」と題する文書が残されています。この文書には、「山田少将」（＝顕義）が降伏した人吉の人々の一部を地方官に引渡そうとしたが、当時は混乱により警察の分署もなかったこと、そこで「新宮中主理」（＝簡）に、三番隊に限り、仮支庁の教導役として使役して良い旨を指図したため、新宮から人吉仮支庁に下げ渡された、といったことが書かれています。当時、人吉は戦乱により行政が機能していない状態でした。そこで顕義と人吉仮支庁（現地に設けられた仮の役所）の間に人吉の事情に通じた官軍側の新宮が入り、人吉の戦後処理を担ったというわけです。その後新宮は、薩軍を追う顕義と一緒には行動せず人吉に残り、７月７日より熊本県二等属・人吉支庁長官兼官となり、西南戦争終結後の10月22日に兼官が解消されるまで人吉平定に努めました。

なお、新宮簡の息子の嘉善（明治８年時点では旧人吉藩主家当主・相良頼紹の家扶）は、人吉隊結成に参画して一番隊小隊長をつとめ、父・簡とは異なる陣営で西南戦争に参戦していました。一説には、嘉善が当時不在であった簡の家を西郷に貸したとも村田新八に貸したともいわれています。嘉善は人吉隊の一人として人吉を攻める顕義と対峙しましたが、６月４日に政府軍に投降しました。そして７月からは旧人吉隊139名を率いて別働第二旅団歩兵第十二連隊の河野通好少佐の配下、つまりは父と同じく顕義の指揮下に入ったことが前掲『日記　別働第二旅団』７月９日、10日の条に記されています。

以上のことからも、顕義は、複雑な地形や人間関係が渦巻く西南戦争を、政府の人材だけでなく地元の人材を活用して攻略・平定していった、まさに「用兵の天才」であったことが垣間見えるのではないでしょうか。

（上野平）

〔参考文献〕
西村隼太郎編『華族名鑑』（西村組出版局、明治８年）、黒龍会本部編『西南記伝　下巻一』（黒龍会本部、明治44年）、西倉基『西南戦役秘帖：球磨史伝』（西倉基、昭和６年）、球磨郡教育支会『球磨郡誌』（球磨郡教育支会、昭和16年）、渋谷勝英『渋谷礼遺翰』（私家版、昭和36年）、高田素次『湯前町誌』（湯前町、昭和43年）、『山田顕義関係資料集成　第一』（日本大学精神文化研究所、昭和62年）、原口泉『戦況図解　西南戦争』（三栄書房、平成30年）



山中栄三郎「明治十年依春至秋　九州戦地一目図」（明治10年）より作成

◆「佐賀の乱」の史跡を巡る②



勝立寺

昨年、学祖山田顕義が参陣した「佐賀の乱」から150年を迎えたことから、前号では、佐賀市内の関連史跡を紹介しました。今回は、続編として福岡市内の関連史跡を紹介するとともに、陸軍少将兼司法大輔の顕義が指揮した、福岡県貫属隊（士族部隊）に志願した士族たちの動向について触れます。

明治７（1874）年２月12日、佐賀県下の情勢が不穏となる中、顕義は九州表への出張を命じられました。16日には、佐賀城に入った熊本鎮台兵と佐賀軍が衝突し、戦端が開きました。

この頃、福岡県士族たちのうち旧「就義隊」（後に玄洋社社長となる箱田六輔など藩士たちが「戊辰戦争」後に組織した隊）300余人は橋口町の勝立寺（現福岡市中央区天神４丁目）で会合し、今後の動向について議論を交わしました。佐賀県士族に呼応する意見など議論はまとまりませんでしたが、小野隆助（太宰府天満宮の神職で真木和泉守の甥、就義隊にも属した。後に衆議院議員）や不破豊吉などの年長者は、彼らに軽挙を戒め会合を解散しました。

顕義は内務卿大久保利通に随行し、野津鎮雄陸軍少将が指揮する大阪鎮台兵とともに、２月19日博多に到着しました。一行は本営を中島の二口屋與平宅（同博多区中洲５丁目）に置き、兵士は西中島橋を挟んで対岸にある前述の勝立寺などに宿陣しました。二口屋は、江戸時代前期に紙問屋として開業しましたが、その後宿屋を営み、天保５（1834）年には７代目市川團十郎が宿泊しています。勝立寺は、福岡藩初代藩主黒田長政から下賜された土地に建てられた名刹で、「西南戦争」では征討総督有栖川宮熾仁親王が、政府軍の仮本営を置いています。



「二口屋」跡
（現在はマンションが建っている）

同日、太政官から、賊徒征討と福岡県などの士族を選抜しての貫属隊募集が布告されました。当時、福岡県の青年士族たちの中心は、「興志塾」（玄洋社の前身団体）で学んだ越智彦四郎・武部小四郎でした。彼らの考えは江藤新平の「征韓党」に近く、越智は途中から佐賀軍に寝返る計画を抱き貫属隊に志願しました。武部は大久保暗殺など別の策を持っていましたが、叶わないと知り一時身を隠しました。彼らと共に前年の「筑前竹槍一揆」の鎮圧にあたった穂波半太郎も隊に参加します。穂波は以前から大久保と通じていて、士族たちの情報を提供していました。内務省八等出仕だったとの説もありますが、定かではありません。



福岡城「三の丸跡」碑

21日、政府軍は本営を、福岡県庁が使用していた福岡城内の三の丸御殿に移しました。顕義は、大阪鎮台兵１個中隊を指揮下に置き、本営の警護も担当しました。

福岡県貫属隊約2,600名は顕義が指揮する県境の三瀬口に投入されましたが、その内900余名は24日から政府軍本隊と行動を共にする田代口に派遣されました。三瀬口の大隊長心得に小野隆助、第２大隊第１小隊長に越智彦四郎、田代口の大隊長心得に不破豊吉、副官心得に穂波半太郎の名があり、半隊長（副小隊長）の一人は箱田六輔だったとの証言もあります。

戦闘は本隊が22日から、三瀬方面は23日から本格化し、政府軍勝利の大勢が決まった３月１日、大久保・顕義らは佐賀城に入城しました。三瀬方面の越智彦四郎一派は、戦闘になったら反撃のそぶりを見せた後に寝返る手筈を進め、佐賀軍側との密談を企てていました。しかし、その最中に貫族隊士が指揮する政府軍先方隊が佐賀軍の急襲を受け、死傷者が出るなど混乱したため共闘の話は流れ、結果として政府軍に与して戦い続けました。

乱の後、越智は武部小四郎と共に反政府活動を主導。明治10年３月、「西南戦争」に呼応して「福岡の変」を起こしましたが、決起は失敗し、両名とも捕縛され処刑されました。一方、穂波半太郎は明治９年10月の「秋月の乱」に際して、臨時雇い警部として「秋月党」の鎮撫に当たりましたが、捕らえられて明元寺（朝倉市）で斬殺されました。穂波は福岡県殉職警察官の第１号として顕彰され、朝倉警察署内と明元寺に碑が建てられています。

福岡県士族による政治活動は、その後の向陽社、玄洋社へと繋がり、言論を通しての運動へと変貌していきます。

（髙橋）

〔参考文献〕
清浦野生『明治丁丑福岡表警聞懐旧談 明治十年福岡の変始末記』（大和塾道場、昭和48年刊）
福岡市史編纂委員会『新修 福岡市史』資料編 近現代１維新見聞記（福岡市、平成24年刊）
「佐賀平賊始末」（佐賀県立図書館寄託資料「鍋島家文庫」）

◆戦時期の日大三中（旧制）関係資料の寄贈

令和６（2024）年12月、東京都在住の川野由美子氏から、父・藤陵嚴達（ふじおかよしさと）が卒業した日本大学第三中学校（旧制）の関係資料が寄贈されました。

藤陵嚴達は、昭和13（1938）年に日本大学第三中学校に入学。18年３月に卒業、１年浪人して19年10月海軍経理学校に入校しました（37期生）。終戦により東京物理学校（旧制）理化学科に進み、卒業後は中学校の理科教員となりましたが、そのかたわら、新制となって東京物理学校から大学に昇格した東京理科大学の物理学科３年に編入しています。

彼は、中学３年生の時に買ってもらったカメラ、特にレンズに興味を持ち、大学卒業後は教員を辞めて顕微鏡メーカーの八洲（やしま）光学工業に就職、その後カメラレンズを製作するズノー光学工業に移り、レンズ設計に携わりました。

寄贈資料は、昭和18年の卒業アルバムや卒業証書、通告簿（通知表）、学校教練の「教練検定合格証明書」や使用していた教科書類８冊など合計25点です。おそらく、中学時代に所持していた自身のカメラで撮った思われる写真も含まれている手製アルバムや、当時の校歌のレコードなど貴重な資料が含まれています。

右は手製アルバムの一部で、台紙に「京都（16.5.16）」「平安神宮」などの書き込みがあります。昭和16年５月14日～17日に、日本大学第三中学校の４・５年生が伊勢神宮・橿原神宮・奈良市内の社寺・京都市内などを巡礼した記事が『日本大学新聞』第359号（昭和16年５月25日付）に掲載されています。５月16日が京都市内見学とあるので、その際撮影された写真に間違いないでしょう。

資料を寄贈していただいた川野由美子氏に御礼申し上げます。

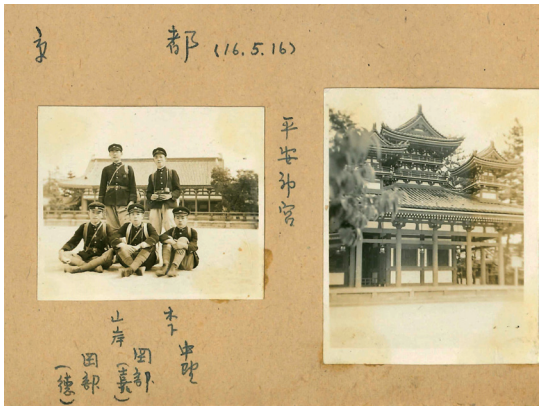
（髙橋）



「昭和17年度　日本大学第三中学校卒業アルバム」より（前列中央が藤陵嚴達）



「日本大学第三中学校々歌」レコード



昭和16年５月に京都で撮影した写真

活　動　報　告

令和６年７月～令和６年12月
（大学史に関する活動）

〇調査・研究

７月２日～４日	学祖山田顯義及び金子堅太郎資料調査（福岡県福岡市）
７月13日	全国歴史資料保存利用機関連絡協議会総会（オンライン）
７月19日	清泉女子大学史料室展示調査（東京都品川区）
７月23日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（明治大学）
７月28日	神田学生街関係資料調査（中央工学校・渋沢史料館）
７月30日	神田学生街関係資料調査（順天学園）
10月２日～４日	全国大学史資料協議会総会ならびに全国研究会（早稲田大学・東京都公文書館）
10月16日～18日	学祖山田顯義資料調査（山口県山口市・萩市）
12月５日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（東京学芸大学）

〇展示

７月16日～８月30日	日本大学とオリンピック　―大学史資料から―　（日本大学会館２階）
９月２日～12月27日	日本最後の内戦・西南戦争と山田顯義　（日本大学会館２階）
11月16日～11月24日	学祖と日本大学　その軌跡　―山田顯義生誕180年・創立135周年特別展― （日本大学お茶の水校舎１階エントランス）

〇研修・講演

９月７日	学祖山田顯義に関する講演（岐阜市せいらん会館　主催：岐阜伎藝學院） 「話と舞　君に捧げん鮎のうを――鵜飼の恩人有栖川宮幟仁親王と山田顯義伯爵」
12月２日	「学祖・日本大学ゆかりの地」視察会（神田界隈　法学部教職員対象）

前号より、紙での印刷が廃止となり、データのみの配信となりました。今後も継続して大学史に関わるニュースをお伝えしていきます。同じく当課発行の『大学史論輯　黌誌』については、日本大学リポジトリで14号以降の各論考について閲覧できます（https://nihon-u.repo.nii.ac.jp/）。

本誌の内容および日本大学の大学史に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。

日本大学広報部広報課（大学史）
E-mail : nuhistory@nihon-u.ac.jp

日本大学大学史ニュース
第28号
令和７年３月５日
編集・発行　日本大学広報部広報課（大学史）
〒102-8275　東京都千代田区九段南４-８-24
TEL 03-5275-8444